

京都大学	博士(文学)	氏名	山 倉 裕 介
論文題目	メルロー・ポンティにおける言葉の問題		
(論文内容の要旨) 本論文は二〇世紀のフランスを代表するメルロー・ポンティが、発話・意味・意思疎通などの言語哲学上の主要問題にたいしていかなる対応しているかを研究する論文である。とはいえ本論文の主眼は、二〇世紀における言語哲学的分析の一例を例示するというよりも、言葉の問題にたいする対処を通じてメルロー・ポンティがどのような哲学を展開したのか、という点を明らかにすることにある。この問いに対して本論は、メルロー・ポンティが実存主義者であったという仮説から出発する。メルロー・ポンティにとって実存とは、事実・状況を捉え直してそこに意味を生じさせることであり、換言すると、超越の運動のことである。言葉の問題を検討する中で、この意味での実存（超越の運動）をメルロー・ポンティが常に扱っており、その深化を図っているということを示す、というのが本論全体の狙いである。 メルロー・ポンティの『知覚の現象学』で論じられるコギト論を吟味すると、暗黙のコギトという概念が一種の表現論を成していることが分かる。すなわち、コギトが表現される（語られるコギトになる）限りで暗黙のコギトの存在が確認され、また同時に、個別的な思惟（語られるコギト）が思惟であるためには思惟一般（暗黙のコギト）が作用している必要がある。暗黙のコギトが実存そのものとされていることからして、語られるコギトと暗黙のコギトを巡るこの議論が超越の運動の究極の姿を示している、と言える。 本論文の二章以下で詳述されるように、言葉の問題は多岐に亘っている。だが突き詰めると、どれもひとところに収斂してくる。まず、一般性を持った蓄積を超え出て個別的に新しい意味を生じさせる、というのが言葉の基礎に在って意味を成り立たせる仕組みである。また、個別的な出来事が起こる時に何がしかの潜在的な論理が既に働いていて、部分-全体の関係から当該出来事に意味が生じる、というのが制度化の考え方である。さらにまた、何らかの統一性が到来する中で差異を生み出す、というのが創造の仕組みである。いずれにおいても問題となるのは、事実の中に在りながらにして如何にしてそこに意味を生じさせるか、という点である。これはすなわち実存（超越の運動）のことであり、言葉の問題は（暗黙の）コギトの問題の変奏であるということになる。本論文はこの事情を解明することで、メルロー・ポンティが一貫して実存（超越の運動）を問題にしていた、ということを示そうと考えるのである。 論文全体は五章からなり、各章の概要は以下の通りである。 第一章「実存とコギト」では、「メルロー・ポンティは何を問題にしているのか」と問う			

ことから始めて、実存こそを彼は問題にしていたのだということを論じる。それも、メルロー・ポンティの思索の中心概念と目される「暗黙のコギト」に関して、実存の重要性を示す。具体的には、『知覚の現象学』第三部第一章「コギト」を実存に着目しながら読み直す、という作業を行う。「コギト」章において、メルロー・ポンティは全ての議論を実存（現実存在）の側から組み立てる。知覚や情緒・感情、それに思惟も、行為という観点から捉えられる。また、思惟行為の結果を踏まえての思惟と看做され得る幾何学や表現・観念についても、知覚や運動・行為に根差したものとされる。さらに、永遠性や明証性といった真偽の価値に関わる場面でも、時間や事実といったものがその基礎に置かれる。

このような議論を積み重ねてコギトに「時間的な厚み」を持たせた上で、メルロー・ポンティはコギト（私が思惟する）の確実性を論じる。すなわち、思惟することを知るに際して個別的な思惟に依存する（依存性）、ということと、一般に思惟するが故に個別的な思惟を持てる（不変性）、ということとを両立させる方法が求められる。こうして彼は、いわゆるコギト（語られるコギト）の周囲に暗黙のコギトを認めるに至る。暗黙のコギト自体は捉え難いものなのだが、コギトが表現される（語られるコギトとなる）限りで暗黙のコギトが存在する。つまり、個別的な思惟が行われている限りで、そこには暗黙のコギトが作用している訳である。個別的な思惟（語られるコギト）が思惟であるためには、思惟一般が作用している必要があると同時に、個別的な思惟が生じている限りで、思惟一般（暗黙のコギト）の存在が確認される。このような円環関係によって、先の依存性と不変性の両立が図られるのである。

以上のような議論を経て導き出された暗黙のコギトには、さらなる展開の契機が認められる。その射程として挙げられるのは、相互主観性・制度化・存在論といった点である。また、実存から暗黙のコギトへと組み立てていく議論は時間性の議論で補完される。未来-現在-過去という推移と、常に現在である諸瞬間、この二つが現在で交差する。先の依存性・不変性の円環関係に通じるものである。これが現在において調整されるのであるが、それは自己触発である。つまり、時間の自己触発が暗黙のコギトを支えているのである。

第二章「メルロー・ポンティにおける言葉についての考え方の基本」では、『知覚の現象学』第一部第六章「表現としての身体、そして発話」での議論をなぞりつつ、言葉というものに対するメルロー・ポンティの考え方を概観する。従来の経験主義的・主知主義的な言語観に対し、メルロー・ポンティは語る主体が不在である点を批判する。そして、彼は「語は意味を持つ」ということを基本に据えつつ、語る主体から出発して言葉の問題に取り組むことになる。語る主体からすると、発話すること（表現すること）と思惟することは一体であり、また、発話してその意味が（自分を含めた）誰かに伝わることも一体である。まず発話と思惟の関係について言うと、それは表象の関係ではなく、「発話は思惟の身体である」として一種の心身関係とされる。心身の間に弁証法

関係を認めるのと同様にして、「発話の中で意味は捉えられ、発話は意味の外的な現実存在である」とされる。その上で発話及び意思疎通の成立について言うと、意味深い志向の自己認識という形でそれは捉えられる。すなわち、既存の意味作用で以って新たな意味深い志向が明らかになることで新しい表現（発話）は成立するのであり、発話する他者の意味深い志向を聞き手の側で捉え直すことで意思疎通が成立する。

発話・思惟・意思疎通をこのように捉えたところで、原初的な沈黙を破る決定的な一歩にまでメルロー・ポンティは遡ろうとする。所作による表現の場合、自他の間の志向と所作の相互性によって意思疎通が可能になる。この場合には、可感的な世界が知覚によって人々に与えられていることが前提となる。言葉を言語的な所作と捉えるならば、この場合には、従前の表現行為や既存の意味作用が共通の世界として諸主体間に確立されている必要がある。この共通の世界について言うと、所作的な自然なものを起源としながらも偶然的・恣意的な規約を加えられて来た、という国語の歴史をそれは負っている。

ここまで来て、意味を成り立たせる力能をメルロー・ポンティは確認することになる。所作一般に関して言うと、自らを開くと同時に他者に了解させるという身体の力能が働くことで、「意味深い核心」が所作に備わる。言葉に関して言うと、蓄積されてきた国語の体系（共通の世界）を前提としつつ、知性にも運動性にも偏らない「第三の機能」がそこで働く。これはすなわち「開かれた経験」であり、自分自身や他者・世界と繋がりを持てることである。一般的に認められている蓄積を前提としながら、それを超え出て、個別的に新しい意味を生じさせる、ということであり、言語と発話や「語られる発話」と「語る発話」の区別（循環的な過程の二局面）をそこに見出す訳である。

メルロー・ポンティはさらに進んで、意味を分泌・創造・投射・伝達する謎めいた本性を固有身体に認める。すなわち、何かの代わりに身体で表すのが表現なのではなく、身体自体が示して身体自体が語るのが表現だ、と解するのである。こうして、主客二元論を乗り越える道筋が示される。

第三章「メルロー・ポンティにおける制度化とソシユール言語学」では、ソシユール言語学に対するメルロー・ポンティの態度を検討することを通じて、言葉に関するメルロー・ポンティの考え方の特徴を論じる。メルロー・ポンティがソシユール言語学に学んでいたことはよく知られている。ただし、ソシユール言語学に対する彼の態度は一様ではない。まず、かなり明白に誤読をする。また、ソシユールの説を受け入れるにしても、相当選択的に受容する。だがそれだけに却って、メルロー・ポンティのこうした態度からは彼自身の関心というものが窺える。

メルロー・ポンティが誤読するのは、国語・発話の区別と共時態・通時態の区別である。この誤読の根底にあるのは、メルロー・ポンティとソシユールの言語に対する関心の違いである。言語学の対象を厳密に規定しようという意図があるソシユールに対し、（発話

に重点を置きつつ)発話と国語の間の相互関係を捉えることにメルロー・ポンティは関心を持っており、またそれと不可分の形で通時態(歴史性)に何らかの意味を持たせようとしている。彼がソシユール言語学から何を学んだのかと言えば、それは記号の弁別性或いは意味の示差性と呼ばれるものである。すなわち、個々の記号は意味を持たず、他の記号との差異(隔たり)において意味を成すこと、諸々の差異から国語は出来ていて、そうした差異から諸項が生み出されること、である。ソシユール言語学にあつて弁別性というのは、記号の恣意性と並んで重要な原理である。その意味で、メルロー・ポンティはソシユール言語学の核心を正しく掴んでいる。

メルロー・ポンティの立場からすると、他者に対して主体が行う発話で、既存の意味作用では言い切れないものを充たすことを通じて意思疎通が成立する、という過程にその関心は向かっている。そして、こうした関心は制度化概念として括られるものである。制度化の観点から見ると、諸々の所与・出来事から意味を生じさせるという点で、表現はまさに制度化である。つまり、過去から受け継がれてきた諸々の所与・出来事を捉え直し、捉え直す限りで当の所与・出来事を明らかにするのである。その際には、弁別性によって意味が明らかになる。この点で、ソシユール言語学の弁別性をメルロー・ポンティは確かに正しく取り入れてはいるが、その理解はあくまでも自らの制度化という考え方の枠内でのことである。換言すると、制度化という考え方に見られる弁別的な特徴と合致する限りで、ソシユール言語学の弁別性は容れられていたのであり、制度化における超越性や歴史性はメルロー・ポンティ独自の特徴となるのである。

第四章「制度化について」では、制度化概念というものをまとめて説明する。制度化概念の定義や道具立てをまず説明し、制度化の例として「作品の制度化」の内容を紹介する。その上で、メルロー・ポンティの思惟における制度化の位置付けについて検討する。制度化というのは、彼のコレージュ・ド・フランスでの講義の中で示された考え方である。制度化とは経験の出来事のことであつて、その経験自体及びその周囲の諸経験に対して意味を齎すものであると共に、その意味を沈殿させて以後の捉え直しの基点にしていくようなものである。他方で、彼が制度化ではないものと指摘しているのが意識による構成である。私の意識・現在というところから構成されるので、他者や過去が空虚なものとなる。これに対抗する制度化概念の道具立てとしては、世界・主体・他者・作為が挙げられる。すなわち、領野としての世界と、そうした領野を生じさせる領野としての主体、そうした主体と共存する他者、様式に従つての作用としての作為、ということである。いわば人為的な構成の要素を取り払い、生に則した道具立てにはなっているものの、このままではどれも両義的で掴み所がない。

そこで件の講義の各論部分から、制度化の具体例として「作品の制度化」を紹介する。ここで取り上げられるのは遠近法の歴史である。そして問題となるのは、発明の必然性と偶然性である。実際のところ必然的な面も偶然的な面もあるが、(制度化の立場から)メルロー・ポンティは過程的な意味に着目し、その時点での合理性の存在を指摘

する。これがどのような仕組みになっているのかと言うと、個別的な作品が制作されるという偶然的な事実に対し、その作品をも含めた事実の積み重ねという歴史(普遍的なもの)が成立していて、当該作品についてのその時点での意味付けが為されるのである。制度化ということで見出されるのは、個別的な出来事が起こる時に、何がしかの潜在的な論理が既に働いていて、部分-全体の関係から当該出来事に意味が生じる、という点である。さらに言うならば、「作用の志向性」の下に「効力のある志向性」が既に働いている、その様を確認するのが制度化である。

本章の最後に、メルロー・ポンティの哲学における制度化の位置付けを考えておく。その際、廣瀬浩司の論文「モーリス メルロー・ポンティ晩年の哲学における制度化の問題性 ― 出来事・構造・肉 ―」を批判的に検討する。事実から出発しての意味の生成、と制度化を捉えるならば、初期の『行動の構造』から最後の『見えるものと見えないもの』に至るまで、メルロー・ポンティは一貫して制度化の問題を追究している。このように考えている点で、本論文は廣瀬を評価する。だが、『知覚の現象学』で論じられる暗黙のコギトと語られるコギトを二項関係のように捉えている点について、本論文は批判的である。そして、『知覚の現象学』の素朴さを補完する位置に制度化を置き、『見えるものと見えないもの』における超反省の議論につなげる、という廣瀬の見方にも反対する。

第五章「言葉の創造性」では、メルロー・ポンティの言語論に則って、言葉の創造性について考察する。具体的には、『シーニュ』所収の論文「間接的な言語と沈黙の声」を創造性に着目して解釈する。創造の仕組みはどのようなになっているのか。絵画において表現されるのは、画家が世界を扱うその仕方(様式)である。また画家が描く限りで、絵画史の或る課題(領野)にその画家も参与していることになる。飽くまでも諸所与への応答として絵画を描いたことが絵画史の中で意味付けされることになる。つまり、出来事の秩序を表現の秩序へ画家が移す、という「その場での超出」こそが絵画における創造に他ならない。こうした創造の仕組みをメルロー・ポンティは表現全般について考察する。すなわち、表現というものが人間的な世界において身体によって為されるのであるからには、文化・意味の秩序という統一性(「到来の独創的な秩序」)が認められ、その統一性の中で個別の表現が明らかにされることになる。絵画であれば、絵画史が統一性として到来して個々の絵画が意味付けされる、これが創造である。こうした創造の仕組みは言葉の場合にも踏襲される。言葉に関して彼が言うのは、いわゆる明確な言葉である「語られる言語」の下に「効力があって語る言語」が見出される、ということである。これはつまり、文字通りの意味の傍らで暗黙の意味或いは言外の意味が生じる、ということである。例えば小説世界といった統一性を背景にして、(「語られる言語」の傍らで)「効力があって語る言語」が働いているこの事態、これが言葉に係る創造なのである。その一方で言葉の使用が積み重ねられると、「語られる言語」が事物そのものを開示するような状態に至る。この時言葉は正確性を持

つことになる訳だが、その端緒の部分では創造性が認められる。

最後に、メルロ-ポンティの哲学の中で創造が占める位置にかんして、反省との共通点が見出される。すなわち、反省は非反省的なものと反省（或いは事実性と合理性・意味）がそもそも結合されているが故に互いに分明になる、という関係をもつ点で、創造という事象と共通性をもっている。反省とは哲学の中心的な発想そのものであり、その反省と本質的な共通性をもつという意味で、哲学の中心に創造という事象の位置していることが確認されるのである。

(論文審査の結果の要旨)

モーリス・メルロー・ポンティの哲学は、サルトルの哲学と並んで第二次世界大戦後のフランスを代表する哲学思想として知られている。彼はハイデッガーの「世界内存在」としての人間の特徴を、サルトルとは異なった仕方で解釈するとともに、フッサールの後期思想からも深い影響を受けて、独自の現象学的哲学を展開した。人間における受肉的知覚というあり方に基礎をおいたその思想全体は、しばしば「両義性」というキーワードでくくられることが多い。しかしながら、本論文では彼の哲学を、人間存在における「超越への運動」という意味での「実存」のあり方の追求の試みとして理解する。そして、この実存というあり方をさらに、言語の成立や言葉の使用という事実即して掘り下げようとしたのがメルロー・ポンティの哲学だと解釈する。本論文は彼の思想を、言語哲学にして同時に実存主義の哲学でもあるという、独特の視点から分析するのである。

言語哲学でありながら実存の哲学でもあるというこの性格は、本論文を通じて具体的には次のような議論として展開されている。すなわち、メルロー・ポンティの哲学は当初から「暗黙のコギト」と「語られるコギト」の相即的關係を軸に構成されているが、これを人間の実存という側面から見ると、一般性をもった基礎を超えて新しい意味を生じさせるという言語行為のモーメントであると理解される。他方、言語の使用における個別的な出来事の成立には、その背後に潜在的な論理が働いているが、この事態はメルロー・ポンティの哲学では「制度化」のモーメントとして掘り下げられている。そして、制度化の形成の働きのなかで何らかの統一性が到来しつつ、同時に差異化の働きも活性化するが、これこそ言語使用における創造性のモーメントである。したがって、実存としてのコギトと制度化、創造性という三つの理論的支柱が、相互に支えあった形で彼の哲学を形作っているのである。

本論文はこのように、一般に両義性の哲学とされるメルロー・ポンティの思想を、むしろ独特なコギトの哲学であると見る点で、ユニークな解釈を展開しているが、そのなかで指摘される次のような事柄は、これまでのメルロー・ポンティをめぐる研究に新しい知見を付け加えるものとして、評価できる。

一) メルロー・ポンティの思想の展開については、これまでいくつかの段階説が提出されてきた。しかし本論文ではむしろその連続性を強調することに主眼点をおき、実存思想としての彼の哲学の一貫性を示そうとする。その際に、実存思想というある意味ではもはや旧来の解釈に属する枠組みを踏襲しながらも、その理論的根底にある問題意識の再考を試みる。それはメルロー・ポンティの実存思想における言語現象と密着した「時間論」の重要性への着目ということである。すなわち、本論文では前期思想の「暗黙のコギト」と「語られるコギト」との相即關係が、時間における自己触発という形式に基礎を置くことが解明されるとともに、この同じ論理が、後期における制度化が浮き彫りにする、言語の内なる「堆積と弁別」というモーメントと同型のもので

あるということが明らかにされるのである。

二) 『シーニュ』に代表されるメルロー・ポンティの中期の言語哲学は、ソシュールの言語論に多大な影響を受けたものであるが、その理論的咀嚼において歪曲や誤解があったのではないかということが、しばしば論じられる。本論文では、二人の理論の比較から、メルロー・ポンティの側に「創造的な曲解」があったことを認めただけで、その核心が「発話における共時性と言語における通時性」という視点の導入にあったことを突き止め、この視点の導入の必然性がコギトにおける「沈黙と表明」の対比に直結するものであることを明らかにした。これは構造主義的思想の先取りという形で解釈されることの多いメルロー・ポンティの哲学を、もう一度コギトの視点からとらえ直す必要性を指摘したものとして意味がある。

三) 『見えるものと見えないもの』や『世界の散文』におけるメルロー・ポンティの後期の思想の特徴の一つとして、それ以前の反省と非反省の弁証法的、円環的關係に加えて、この関係そのものを内的な視点から構造分析しようとする「超反省」の次元の導入ということがしばしば挙げられる。しかし本論文ではこの一種の超越論的な次元が、『知覚の現象学』などの前期の思想の根本的な改訂ではなく、むしろ前期の反省概念に本来含まれていた哲学的反省の要素の明確化であることを明らかにした。

本論文は以上のように、言葉の問題を中心に据えてメルロー・ポンティ哲学を解釈しなおした、独創的な研究である。その分析は膨大なテキストの解釈と二次文献の渉猟に裏打ちされており、説得的な解明手順とともに提示されている。あえて難点を指摘するとすれば、次のような点が不十分であることが惜しまれる。本論文ではフッサールやサルトルなど、メルロー・ポンティが対決した彼に先行する現象学との比較には重点が置かれていないため、本来の行動の理解や知覚の分析において展開されているような、心身問題を始めとする哲学の中心問題をめぐるメルロー・ポンティの解決の意義などが、かえって見えにくくなっているきらいがある。この点を補って本論文の主旨を哲学的に深化させることが、筆者の今後の課題であろう。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成22年11月4日に、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。